足立巻一

立川文庫の英雄たち

足立巻一

立川文庫の英雄たち

文和書房

立川文庫の英雄たち

昭和五五年八月一日　初版印刷
昭和五五年八月五日　初版発行

定価　一五〇〇円

著者　足立巻一

発行者　川上和秀

発行所　株式会社 文和書房
東京都文京区小石川三-一-三
電話　東京　八一三-六五四一
振替　東京　八-一一六六四九

整版　山口活版所
印刷　多田印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

© 1980

0095—018005—7427

立川文庫の英雄たち　目次

I

考説立川文庫

はじめに　7

一　源流——文庫創刊以前　9

立川文明堂の創業　13

そのころの大阪の出版　13

『百千鳥』と速記講談　15

大阪の赤本　20

文明堂の出版活動　25

明治末年の貸本　31

玉田派と玉田玉麟　40

山田敬と山田都一郎　48

酔神たちの書き講談　52

二　創刊と初期　58

袖珍文庫　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

初刊十編の特徴　71
一休禅師　76
水戸黄門・大久保彦左衛門・野花散人　81
真田幸村　85
猿飛佐助　91
霧隠才蔵　94
『西遊記』の影　97
丁稚という読者　103
三　全盛と終末　107
数を重ぬる一百種　107
文明堂の日常　110
印刷屋と製本屋　118
小型文庫双書の流行　122
忍術映画と忍術ブーム　127
執筆集団と出版元　130

終刊前後 134
『立川文庫』刊行一覧 142

II

真田幸村とその影武者 157
猿飛佐助の成立——中川玉成堂本と松本錦華堂本を中心に 171
石川五右衛門——負の英雄 191
忍者と隠密 203
『立川文庫』の終焉——池田蘭子の死 215
あとがき 235

I

考説立川文庫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

『立川文庫』の〈立川〉は、タツカワと読む。

発行者立川熊次郎の一族は[1]タツカワと称したし、第百八編『猿飛佐助江戸探り』の末尾に「次（つぎ）に発（はっ）行（かう）する立川文庫（たつかわぶんこ）は怪傑梵字太郎」と、はっきりルビが打ってある。

しかし、いまなおタツカワと読む人は、すこぶる少ない。たいていがタチカワ、あるいはタテカワである。人名・地名の立川をタツカワと読ませる例が至って少ないことによるが、発行元もタツカワと読ませることをそれほど積極的に主張しなかったようすで、一般にはタチカワが通称となった。

また、『立川文庫』は固有名詞ではあるが、いまでは「立川文庫的」あるいは『柴錬立川文庫』というように大衆文化のひとつの型をさす場合が多いので、通称に従ってタチカワと呼んで差し支えあるまい。現に、平凡社版『世界百科大辞典』、明治書院版『現代日本文学大辞典』、学研版『新世紀大辞典』、岩波書店版『広辞苑』（第二版）など、いずれもタチカワとし、わたしも新潮社版『日本文学小辞典』では通称に従ってタチカワとした。

『立川文庫』は、明治四十四年『諸国漫遊一休禅師』を第一冊とし、大正末年まで約二百点を刊行した。発行者は、大阪市東区博労町四丁目十三番地、立川熊次郎、発売元は同じく立川文明堂である。

体裁はタテ一二・五センチ、ヨコ九センチの小型本である。表紙は布クロースで、赤・青・黄・緑・黒・藍・紫の七色を編に応じて用い、右半分には揚羽蝶の地文様をから押しし、左半分には編数、題名を白字で抜いた。天金を打ち、背も金文字であった。巻頭には長谷川小信筆の口絵一葉をつけ、本文は二三〇～三〇〇ページ、六号の総ルビ活字を用いた。紙は最初は上質紙を使ったが、版を重ねるにつれて粗悪なザラ紙となった。校正・印刷は良好とはいえず、乱丁・落丁のものも少なくない。

定価は一部二十五銭で、のちに三十銭となったが、当初には旧編に三銭をつけると新編と交換するという交換販売がおこなわれ、これが文庫の普及に効果をあげた。

読者は、最初は大阪の少年店員が多かったが、次第に小・中学生に読まれるようになり、ことに第四十編『猿飛佐助』が発刊されると全国に大正期の忍術ブームを巻きおこした。そのころのことで正確な発行部数はつかめないけれども、『猿飛佐助』が大正期のベストセラー、ロングセラーの上位にあったことは疑いない。

中野好夫編『現代の作家』(2)は、二十人の現代作家に人間形成の過程を直接に聞いた記録であるが、そのうち、中野重治・高見順・丹羽文雄・石川達三・椎名麟三・川端康成・大岡昇平の七作家が少年時代には『立川文庫』を読んだことを告げている。ことに、丹羽文雄は「僕らの世代のたいていの人のように、読み物らしい読み物は、例の『立川文庫』がはじめだった。中学の入学試験を受ける前頃

から読み出して、夢中になったあまり、とうとう入学試験に落第したくらいだった」と、冒頭に述べている。

こうした事実に、中野好夫は注をつけて、志賀直哉や正宗白鳥の少年時代を、いわば「八犬伝の世代」とすれば、次の「立川文庫の世代」の現れたことを注意しておいてよいと思う、としるし「蓋し明治、大正、昭和の文化を語るのに、『立川文庫』は見逃すことの出来ない存在であるのだ」と述べている。

これは何も作家に限ったことではなく、大正期に小・中学生であった大多数の人たちにひとしく共通する事実であろう。ただ、その場合、『立川文庫』といっても、文庫そのものをさすというより、そのころ文庫の大当たりから続出した小型講談双書を引っくるめていわれることが多い。『立川文庫』を熟読したという人に実物を見せると、いぶかしそうな表情を示す人が案外多く、その人が読んだのは類書であったり、文庫以後に出た講談本であることがわかったというような例に、わたしはしばしば出会った。つまり、それほど、『立川文庫』は強固な社会的概念となって、わたしたちの記憶の底深くに焼きついているものなのである。

しかし、それほど広く読まれた文庫も、現存するものは少ない。天理図書館、熱海市の久保田茂樹氏が最大の文庫所蔵者であるが、どちらも全編揃っていない。多くは戦争中、慰問袋に入れられ、あるいはたきつけとして燃やされ、さらには幼稚不良の出版物として捨てられたのである。それで、文庫はいまでは稀覯本となり、昭和四十八年十一月、大阪古書組合創立五十周年記念として催された「古書籍大即売会」では、『三好清海入道』が三千円、『一休禅師』『天狗坊大秀』『渡辺大学』の三冊

が六千円という高値がつき、即刻落札された。それほど、『立川文庫』の入手・閲読は一般に困難となっている。

また、『立川文庫』は大正文化として、大衆文学・児童文学の前史として、どうしても無視できないものであるが、その研究も、戦後、それも昭和三十年代になってようやくはじまったばかりで、未詳のことがすこぶる多い。

（1）昭和四十二年三月十三日『毎日新聞』（大阪市内版）連載「大阪百年」の「立川文庫」の項に「立川一族の家名はタツカワ。したがってタツカワ文庫と読むのが正しい」とある。当時、立川熊次郎の三男熊之助は毎日新聞（大阪）社会部長（のち編集局長）であったから、この記事もその意見に拠ったものと思われる。

（2）中野好夫編『現代の作家』、昭和三十年、岩波新書版。岩波書店発行の月刊誌『文学』の昭和二十七年一月号から二十九年八月号までに連載されたもの。田宮虎彦の項の注にも、『私の読書遍歴』によると、「子供の頃……私は『譚海』といった小型な雑誌を買ってもらっていた、それと立川文庫」（二五二ページ）とある。

一　源流——文庫創刊以前

立川文明堂の創業

『立川文庫』の発行者立川熊次郎[1]は、明治十三年、兵庫県揖保（いほ）郡勝原村宮田（いま姫路市勝原区宮田）の農家の長男に生まれた。

父が堂島の定期米相場で家産を失ったため、生活は貧窮していたという。熊次郎は農閑期には酒造りとして大阪へ出稼ぎに行き、あるいは製粉業を営む姫路市飾磨区の親戚の家で働いたりしたが、よく働いて金を蓄えたという話が語り残されている。大阪市北区の酒造業伊豆屋宗兵衛方に住みこんでいたときは新入りが米をとぐしきたりになっていたが、かれは寒中夜なかにこっそり起きて米を洗ったり酒造りの研究をしていたりしたとか、製粉場では同僚が給料日に遊郭へ遊びにゆくのに見向きもしなかったとか、そういう話が伝聞のかたちで記録されている。とにかく、勤勉で、倹約家で、肉体

も頑健な人物だったようである。

熊次郎は小金を貯えると、二度大阪へ出て生活の開拓をはかり、日本橋五丁目の裏長屋に住んで酒や炭のはかり売りなどを試みたが、いずれも失敗に終わった。

ところが、そのうち、大阪で女中奉公をしていた長姉かじが赤本問屋の岡本増進堂を創立した岡本増次郎と結婚し、その家業も成功した。赤本とはもともと草双紙の一種、丹表紙本の呼称で、ついで女性・年少者向けの草双紙・絵本などを呼んだが、のちには小説・講談本などをも称するようになり、大阪ではその出版・販売ともに盛んであった。増進堂は道頓堀二ツ井戸に店を構え、もっぱらその赤本を小売店・貸本屋におろしていた。

熊次郎は明治三十三年、二十一歳のとき、増進堂の店員となり、本屋業を学んだ。そのうち、店の新刊本を借り、一反(いったん)ぶろしきに包んで小売店・貸本屋におろして歩き、その零細な利潤を蓄えるようになった。また、次姉こすみがとついでいた揖保郡網干町の井上寅之助も、明治三十六年には大阪へ出て来て井上盛進堂という本屋を開いた。

熊次郎がふたりの姉婿の支援もあって独立したのは明治三十七年三月、二十五歳のときであった。心斎橋筋を西へはいった東区唐物町四丁目十八番地に十二円の家賃の小店舗を借り、立川文明堂の看板を掲げたのである。妙好人といわれるほどの仏教信仰家であった岡本増次郎の影響を受けたのであろうか、熊次郎は若いときから熱心な真宗信者であり、文明堂という屋号は、蓮如の御文章には文明年間のものが多く、また、書店は文明を啓発するところから命名されたといい伝えられている。

当初は取次業で、熊次郎はやはり大ぶろしきで本を背負っては売り歩いていたが、少しずつ出版に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.